



## ⑮ 生理ちゃん

「生理」、つまり女性の月経。かつては話題に挙げることにするタブー意識が強く、男性のいる場ではおろか、女性どうしても語り合うことが難しいテーマだったといえます。10代前半から40、50代までという長い期間にわたって起こる現象ですが、人によって身体に生じる影響は千差万別。大学での発表や仕事での商談が生理の期間にあたってしまい、しっかり準備をしたのに、よい結果につながらなかったという女性の話を聞くこともあります。一か月の半分は調子が悪く、PMS（月経前症候群）で寝込んでしまうほどつらいという人も。PMS対策でピルを服用する人もいます。

美容サロンを運営する株式会社ミュゼプラチナムと特定非営利活動法人日本子宮内膜症啓発会議が2019～20年に実施した「生理に関する調査」によると、「月経随伴症状による労働損失は13億8,700万円」であり、これは適切な対応をすることによって「5億3,100万円まで削減が可能」だということです。

ただ一方で、「生理の影響がまったくくない」という人がいるのも事実です。生理が軽い女性や、身体的に生理の経験がない男性からは、「自分のことは自分でケアすべき」「怠けている」といった冷たい言葉が向けられることもしばしばです。

小山健さんの『生理ちゃん』（KADOKAWA ①～④ 2018-2021）は、生理を擬人化したキャラクター「生理ちゃん」と女性たち、男性たちの物語をオムニバスで描いた作品です。

ピンポン。チャイムが鳴って「誰かしら？」と玄関を開けた主婦の前にいたのは、ピンクのハートマークを立体化したような「生理ちゃん」。

「もう一カ月たったの？」と戸惑う女性に、生理ちゃんは「どーですか最近は」「ダンナさんとはケンカしてないですか？」と世間話をはじめます。

「もう結婚して7年だから…」と応じる女性に、生理ちゃんは「じゃあそろそろいつものを…」とお腹に強烈なパンチを放ちます。暴力から身を守っていると、今度は巨大な注射器を刺されて血液を抜かれます。

「はーしんどい」とうなだれる女性に、生理ちゃんは表情を変えずに「ごめんね」と呟きます。(第一巻「主婦と生理ちゃん」より)

ライターの九条さんは面白い記事が書けずに煮詰まっています。彼女のもとにも「来ちゃった」と、生理ちゃんがやってきます。「締め切り前なんだからカンベンしてよ」と叫ぶ九条さんに構わず、お腹をぎゅうっとつねる生理ちゃん。さらにクロロホルムを嗅がせられ、九条さんは眠気に襲われます。男性の編集者が生理ちゃんと一緒に、ナプキンを買いに薬局へ行ってくれます。

「女性は生理があるから大変だよ」という編集さんに、生理ちゃんは「大変なのを、生理を理由にできないのが大変なんですよ」と返します。(第一巻「ライターと生理ちゃん」より)

生理を擬人化すると、こんなに不思議な世界になるのかと驚かされます。べてるの家から始まった「当事者研究」では、困難な課題を外在化させるために擬人化を行うのですが、「生理ちゃん」の作品世界も似た発想で構成されているように思われます。

「当事者研究」では、たとえば統合失調症患者のもとに「幻聴さん」がやってきます。「お前は犯罪者だ」などの事実ではないメッセージが、声のように感じられます。「来るな」「消えろ」と幻聴と戦うのではなく、「幻聴さん」として人格を与え、「幻聴さん」が勝手にやってきては勝手に帰っていく様子を眺めてみたり、どうして来るんだろう、何を求めているんだろう…と考えて「幻聴さん」とのつきあい方を探ってみたりすることが当事者研究です。それによって、結果として症状との付き合い方が変化し、症状の安定化が起こるという取り組みです。

ネガティブ思考のパターンを「マイナスのお客さん」、対人恐怖の兆候を「緊張さん」と呼ぶなど、色々な課題をキャラクター化させて捉えると、自分の抱える問題と自分自身との間に距離が生まれます。それ自体は解決に繋がらないと指摘されるかもしれませんが、距離を取ることで、対応がしやすくなるのです。問題と戦わないことで、QOLを上げるという手法です。

ライターの九条さんのもとにきた「生理ちゃん」は、編集さんに「毎月迷惑がられてるのに来なきゃいけないの、ツラくないの？」と問いかけられて、答えます。「…ツライですけど、いつか、全部ひっくるめて良かったと思ってもらえるんじゃないかと」(同上)

九条さんの編集者は既婚者なのに、九条さんに手をつけていたのです。しかもコンドームを使わなかったのです。編集者が帰った後、生理ちゃんは九条さんに言います。「こちらら、しがない生理なので道德語る気はないですけど、ちゃんとつけない男はダメ!」「今日来れなかったら、どうしようかと思いましたよ!」(同上)

「生理」に人格があるとしたら、いつも嫌がられて悲しいかもしれません。でもいつもは「しんどい」「嫌だ」と感じさせられる生理でも、来ないとすると心配になることもあります。そして来てくれたら「よかった」と安心できるのです。

「生理が、私のことを気遣っているかもしれない」「嫌がってばかりでごめんね」と考えられるとするならば、それは女性の身体のマカニズムについて、いつにもまして感謝できるきっかけになるかもしれません。

いわゆる「女性のライフイベント」には保育や社会福祉に関わることがたくさんあります。生活困窮家庭で育つ若年女性は、生理用品を買うにも困る状況があります。妊娠や出産のタイミングで職を離れたり、育児のサポートや保育、教育。離婚した場合のひとり親問題。心身に障害を負うこともあります。やがて親の介護など…。こうした問題に「女性のライフイベント」というレッテル貼りをして、女性が対応するべきものと決めつけてはいないでしょうか。

障害をもつ女性やその周りにいる人にとって、生理のケアはとてもデリケートで、難しい問題です。旧優生保護法の時代(1948-1996)には障害者を対象に、合計でおよそ1万6500件もの断種手術が行われました。生理のケアや妊娠の可能性をなくすことが良い事だと考えられてきたのです。

また、ケアワークそのものが女性の領分だと考えられがちです。保育や社会福祉の現場で働く人たちには女性の職員がたくさんいます。保育や社会福祉の現場の管理者は、生理をはじめとした職員の心身の健康に関する課題を意識できているのでしょうか。むしろ心身の不調を訴えるケアワーカーに対して、「自分のことは自分でケアするべき」「怠けている」と叱咤激励する(実際にはハラスメントに近いものである危険性がありますが)という管理職が目につく、ということないでしょうか。

ある小学校にやってきた4人の女性。年齢も職業もバラバラです。この人たちは性教育の講師です。5年生の男女混合クラスで生理について伝えることに。

講師の一人が、男性の先生にクイズを出します。「奥さんに生理ちゃんが来てます。なにを買って帰ったら喜ばれるでしょう?」「ハーゲンダッツとか…?」と答える先生に、4人は「貼るカイロ」「お惣菜」「鉄分ドリンク」「ホットはちみつレモン」と様々な例を出します。でも正解は、「いろんなタイプがいるから奥さんに聞け(なにもしないでほしい人も

いるから気をつけてね)」。

小学生が「生理ちゃんで困ったことはなんですか？」と質問します。「本当につらい時も生理休暇とれないことかな」「元彼に、俺の前では生理になるなって言われた」「同級生に見られたら変な噂されるから、変装して婦人科にピルをもらいに行ってる」…

4人の講師は「恥ずかしい気持ちは当然あるものだし、生理ちゃんをオープンにしようってことじゃないの」「もっと普通にあるものとしてわかってほしいんだ」「知らないことには思いやることもできない」と口々に伝えます。(第二巻「小学生と生理ちゃん」より)

何でもオープンにすればいい、ということはありません。しかし性や生理について、秘め事やいやらしい事のようなイメージを持って大きくなった人たちが、無理解と偏見を改められずにいるとするなら、それは問題です。デリケートなことだからこそ、女性だけでなく男性も知っておき、辛そうにしている人がいれば生理かどうかに関わらずケアしてあげられる、そんな社会を作ることが理想ではないでしょうか。

「生理ちゃん」には、日本で初めて使い捨て生理用ナプキンを開発した坂井泰子さんの実話をもとにした回(第一巻「おばあちゃんと生理ちゃん」)や、かつてケガレと考えられていた生理期間中の女性がこもった「月経小屋」が描かれる回(第一巻「町娘と生理ちゃん」)などがあります。ジェンダーについて学ぶ視点も得られる作品です。

紹介作品：小山健(2018～2021)『生理ちゃん①～④』KADOKAWA

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考サイト：PR TIMES 企業初、月経随伴症状による労働損失額を調査 年間約14億円にもなることが判明！ ミュゼプラチナム×JECIE『女性活躍・健康経営プロジェクト』

株式会社ミュゼプラチナム 2021年10月6日 15時00分

<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000349.000008905.html#:~:text=%E7%B5%8C%E6%B8%88%E7%94%A3%E6%A5%AD%E7%9C%81%E3%81%8C2019,%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%EF%BC%88%E2%80%BB4%EF%BC%89%E3%80%82> (最終確認 2021. 11. 13)

NHK 福祉情報サイトハートネット 【後編】旧優生保護法を陰で支えた社会通念 2018年07月20日 <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/79/> (最終確認 2021. 11. 13)